

## タンザニア生活事始

著者	池野 旬
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アフリカレポート
発行年	1990-09
出版者	アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00008648">http://hdl.handle.net/2344/00008648</a>

# タンザニア生活事始

池野 旬

アジア経済研究所アフリカ総合研究プロジェクトの海外調査員として、タンザニアの首都ダルエスサラームに住み着いて、はや3カ月がすぎた。この期間を振り返ってみれば、家族連れということもあって、生活基盤の設定に明け暮れていたように思う。まだ記憶の新しいうちに、タンザニアとくに首都ダルエスサラームの生活の初印象について報告したい。

ダルエスサラーム到着後、ひとまずホテルに落ち着く。なぜこのホテルが……というほど、低サービスと高料金のホテルに宿泊せざるをえない。最高級ホテルとはいえ、公社経営のホテルのサービスはもうひとつ芳しくない。そのうえ、これはホテルのせいにしてはかわいそうであるが、停電が始終あり、一旦停電すると、給水ポンプが止まって水も出なくなり、電気器具で調理しているレストランの料理も代替の調理施設を使うためか、品数が限られ時間もかかるようになる。かつてそのホテルに同宿した時、ある知人が「これほど物のない国でこのホテルを維持するのは金がかかるんでしょね」と嘆息していたが、けだし名言である。その維持費が、ホテル料金にそのまま上乗せされているのであろう。

もっともダルエスサラーム市のホテルは、タンザニアのホテルのなかでも最悪であると酷評する人もいる。たとえば、北部のモシ市はキリマンジャロ山への登山口として、アルーシャ市は東アフリカ随一のセレンゲティ国立公園の玄関として、外国人観光客向けのホテルが一応整っている。そ



ダルエスサラーム市内の青空魚市場

の点、ダルエスサラーム市自身にもインド洋という観光資源があり、市の北部にリゾート・ホテルが点在するが、そこまで行くのは、至難のわざである。数年前に訪れた折りに一度リゾート・ホテルに出かける機会があったが、タクシーの運ちゃんに行き先を告げると、乗車拒否された。理由は穴ぼこと洗濯板状の道路の連続で車が傷むというものであった。市街域に隣接した国立公園を持ち、冷涼な気候で外国人観光客でにぎわっている隣国ケニアの首都ナイロビと、観光客の集散地になりえないダルエスサラームは好対照をなしている。

さて、ダルエスサラームで生活を始めるためにやってきたわれわれは、そういつまでもホテル住まいを続けているわけにはいかない。治安、水道給水の確かさ、交通の弁の3点を基準に、家探しを始めた。以下、それぞれに関連する現地事情について、触れていきたい。

一つ目の基準である治安については、ごく身近な住まいの安全もさることながら、タンザニア全体の政治状況も重要である。1964年の建国(タンザニア本土部分の独立は61年。63年独立のザンジバルと64年合併してタンザニア連合共和国となる)以来、タ



ンザニアはムワリムの愛称で慕われるニエレレ大統領のもとで、政治的にはいたって安定してきた。85年にニエレレが大統領を辞し、現在のムイニ大統領に政権が移譲された。この平和裡の政権交替は、タンザニア政治の安定性を示す事例であろう。しかしながら、このときニエレレはタンザニアの唯一の政党 CCM 党首の職を保持したため、完全な権力移譲ではなく、会社組織にたとえれば、ニエレレは代表権を持つ会長職に退いたのである。そのニエレレが、この8月をもって CCM 党首も辞任することを公表した。

ただし、ムイニ大統領が全面的にタンザニアを指導していくことになるかは、やや不明な点もある。タンザニアの国内事情である権力移譲と同時期に、いわば東欧の一連の改革のあおりをうけて多党制採用の問題が論議され始めているためである。多党制論議は現行法上は禁句のはずであり、多党制の採用によって単一政党 CCM は脅威を受けるはずであるが、むしろ現党首ニエレレが率先して多党制の議論を押し進めている感がある。ニエレレが多党制の議論は今後避けられないと判断し、余人をもっては言い出しにくいこの問題に自ら口火をきり、ムイニ大統領が今後多党制の議論を展開しやすくしたのか。あるいは、多党制の採用によって、ムイニ大統領の権力に一定の歯止めをかけようとしているのか。いまだその意図は不明である。

いずれにしろ、最近の新聞紙上では、読者の投書まで含めて、多党制の論議が紙面を覆っている。少なくとも、多党制の議論が自由にできるという状況が作り出されたことによって、政治的圧力のいわばガス抜きがなされている。親欧米の経済路線をとる隣国ケニアではモイ大統領があくまで一党制の維持に固執し、死傷者まで出る事態に至ったのと比較すれば、タンザニアのほうが賢明な選

択を行なったといえよう。本年秋に総選挙を控えているタンザニアでは、CCM 党首の後任、多党制の問題と絡めて、当分政治の季節が続く。ダルエスサラームに居住する者にとっては幸いなことに、暴力的な形で政治問題の解決が図られる危険はなさそうである。

さて、身近な治安の問題に話を戻せば、ここ数年でも、日本人居住者が自宅で殺害されるというような事件があり、家の安全は重々おろそかにできない。政府高官の居住する地区ではダルエスサラーム市中心街からやや離れたムササニ半島が、外国人住居も多く最も安全といわれている。やはり同市の北東部にアダ・エステートやリジェント・エステートといった新興高級住宅街が開けつつあり、家屋自体はムササニ半島をしのぐ瀟洒なものもあるが、中低所得者居住区に近いために泥棒が多いと、もうひとつ評判がよくない。また、中心街に隣接した旧住宅街ウパンガ地区は、泥棒市場ともよばれるカリアコー市場に近いが、その割には被害は少ないようである。ウパンガ地区に泥棒が少ない理由として、陸軍駐屯所や警察支所が点在していることを挙げる人もあるが、それだからかえって危ないと、軍隊や警察に信を置いていない人もいる。いずれの地区に住むにしろ、自衛しなければならない。こちらでグリルといっている鉄格子をドアと窓にとりつける(ときどき動物園の檻のなかに入れられているような妙な気分になるが)、夜警を雇う、犬を飼う等々である。ガードマンの派遣、無線での警備システムを提供する企業も存在し、かなり成功しているようである。

家探しの二つ目の基準は、水道給水の確かさである。風呂好きの日本人ならずとも、生活用水の安定供給は死活問題であろう。今の時期は渇水期ではないにもかかわらず、すでに水道の給水が不安定な地区がある。たとえば、ムササニ半島は高

級住宅街の例にもれず高台にあるため、水不足の問題が始終つきまわっているようである。家探しに行った折りも、同地区の一軒の家で消防車が作業していた。火事でもないのに何をしているのかと同行者に訪ねたところ、消防車の水をその家の貯水タンクに給水しているとのことであった。もちろん、消防署が公務で一般家庭に給水することはありえず、消防車の運転手かその上司がアルバイトで給水しているのである。新興のリジェント・エステートも問題があるようで、同じく新興住宅地アダ・エステートの借家をみせてくれた奥さんは、自分の借家の良さを強調する意味もあってであろうが、リジェント・エステートは低地にあるため、雨季には家のまわりに水があふれるが、家の中では水道から水がでない、と大笑いしていた。最終的にはウパंगा地区に求めたわが家は、水の問題がないはずであったが、ここ1週間ばかりは貯水タンクの水が目減りする一方であり、週末にはついに干上がってしまった。

最後に、交通の便は、道路状態の悪さと交通渋滞とからみて、家選びの重要な基準となる。まず、道路の維持管理が十分になされていない。中心街の目抜き通りであるサモラ通りのアスカリ・モニュメント(戦士の像)はダルエスサラーム市の顔であるはずだが、それを取り巻く周回道路にも、スピードを出して突っ込めば車の破損は必至という大穴が開いている。目抜き通りがこの状態であるから、住宅地区内の道路は推して知るべしである。未舗装の道を野を越え山越えて、雨季には大きな湖まで道のまん中にできてくれ、まさに毎日がオフロード・ドライブである。ダルエスサラーム市内ですら、一般乗用車より4輪駆動車のほうが適しており、以前2年間滞在したナイロビとくらべても4輪駆動車が圧倒的に多い。

ダルエスサラーム市の交通事情の悪さは、実質

的に片道1車線という道路の許容範囲を上回る自動車数にもよるのではないかと。比較のデータを持ち合わせないが、近年かなり自動車数が増えているという印象をうける。ひとつには、1980年代半のIMFとの和解後、外国援助が増大し、それに伴って多数の外国人専門家が到来し、かれらの使用するTXナンバーの車が至るところを走り回っているためである。もうひとつの車がふえる原因は、公務員や政府関係機関職員が、車を安い税金で輸入できることである。一般民間人が車を輸入しようとする、cif価格のほぼ300%近い税金が、関税および販売税の名目で課せられる。ところが、政府および政府関係機関職員は、3年置きに1台ずつ、5%の税金のみで輸入できるのである。タンザニア人の友人に聞けば、公務員や政府関係機関職員の労働意欲向上のためのインセンティブであるという。これほどのインセンティブが必要なほど、労働意欲が落ちているということか。もっとも、このインセンティブは、実際には上級職に限られる。タンザニア・シリングをいくら持っていようと、外貨を持っていないかぎり外国に車を注文できないのであり、上級職のみが外国研修あるいは留学によって外貨入手の機会に恵まれるためである。筆者もいく先々で、日本に行きたいが……と聞かれ、日本の経済発展の秘訣を知りたい、コンピューターについて勉強したい等、皆それなりの目的を披露してくれるのであるが、ついつい中古車を買いにいくのではないかと、勘ぐってしまう。日本の中古車輸出業者の広告を張り付けた車があふれている。なかには、「○×商店」と企業名が日本語で書かれたままの軽トラックや、この暑いダルエスサラームで「寒冷地仕様」のステッカー付きの車まである。

自動車数の増加も、ムイニ大統領のもとで1986年以來推進されてきた経済自由化政策の「成果」



であろう。前号の『アフリカレポート』で「ダルエスサラームの人々の暮らし」と題して、古沢紘造氏が詳しく報じられているとおり、ダルエスサラーム市には、種々の輸入品が出回りだしている。われわれもその恩恵に預かって、1リットル容器で2500タンザニア・シリング（1990年7月現在の公定レート、1タンザニア・シリング=約0.8円）というとてもない値段であるが、日本の輸出用醤油も手に入れられる。ニエレレ前大統領が提唱し、多くの社会学者を魅了したタンザニア型社会主義、すなわちウジャマー社会主義はどこにいったのか。このような疑問を抱かせるほど、現政権の経済自由化政策は、まさにタンザニア経済そして社会を一新しつつあるように感じられる。

ただし、経済自由化のもとで、ダルエスサラーム庶民の生活は楽にはなっていない。本年6月に大蔵大臣が1990/91年度予算演説のなかで、法定最低賃金を月額2075シリングから2500シリングへ引き上げる旨、発表した。25%近い賃上げと聞けばうらやましくなるが、コーラ1本50シリング、ビール1本200シリングであれば、賃上げ後の賃金ですら驚くべき低さである。T・L・マリヤムコノ博士とM・S・D・バガチュワ博士共著の *The Second Economy in Tanzania* (London /Athens /Nairobi /Dar es Salaam, James Currey /Ohio U.P. /Heinemann Kenya /ESAUERP, 1990年) によれば、86年時点で正規採用賃金労働者の平均月収2000シリングでは、毎月の生計費の12日分しか充当できなかった。同年以来、年率30%前後のインフレが続くなか、実質賃金はさらに目減りの一途である。

その一方で、外国人相手に外貨払いで、借家を貸し付ける「階層」がいる。外国人相手の借家の家賃は、公定交換レートで計算しても最低賃金の百数十倍から数百倍に達する外国人相手の借家は、外国に行かなくても国内で外貨が稼働できる手っとり早い方法であり、

リスクも少ない。家探して10軒以上の家を見たであろうか。借家の大家は、前某国駐在大使夫人、タンザニア独立当初の陸軍参謀長夫人等々と、タンザニア高官の家族たちであった。タンザニア社会に「階層」化が進行している印象を免れない。見せてもらった借家は、その傷み具合からみても、どれも1980年代半の経済自由化以前に建設されたものである。「階層」化の根も、80年代前半までのウジャマー社会主義の推進・停滞期にさかのぼりうるのではないか。

はたして、彼らは、稼働した家賃を、何に使っているのか。他の事業に投資するのか、車を輸入するのか、豪華な生活のための費用に充てるのか。どういうわけか、虎の子の借家の維持費には回っていないようなのである。アフリカでタクシーに乗ると、まずガソリンスタンドに行くという、よく聞く笑話があるが、ダルエスサラームでは借家も同じで、借家人が決まって家賃を前払いしてもらってから、家の改築を始める。その家賃も1年前払いが、普通である。改築すれば、どれほど良くなるかを力説してくれるが、実際どうなるのか、いつ改築が終わるのかは、まったく五里霧中である。借り手のリスクは、かなり大きい。

さて、自らの家探しという個別具体的事例で、タンザニアとくにダルエスサラームでの生活者としての第一印象を記してきた。タンザニアは、政治のトップの交替、第2期の経済自由化政策の推進、そのもとでのあるいはそれ以前からの社会的「階層」化の進展と、政治・経済・社会いずれの側面でも、いま大きな転換点を迎えてつつある。ただし、転換の方向性は、いまだ定かではない。今後2年間滞るうちに、タンザニアはどのような方向に、どれくらいの速度で転換していくのかを、随時『アフリカレポート』で報告していきたい。

(いけの・じゅん/在ダルエスサラーム海外調査員)